

男長

ひとりごと

(42)

斉藤 讓

篠本のスポーツ公園の工事現場を、まるで根城のようにしている、一匹の白い牡犬の中型犬がいる。

その名を「シロ」といい、こ

こに働く人々や、訪れる人からかわいがられる愛嬌者である。聞くところによれば、現場監督をしている社員が、弁当を分けあつて飼っているという話であるが、ここに来る。真夏の炎天下、厳冬の寒天の下であろうと、彼は平然として日がな一日現場のあちこちを歩き廻っている。人や車が入って来ると、どんなに遠くにも目もつけ、敏感に見つけ、まるで不信な闖入者が入り込んで来たのではないかというように脱兎の如く駆け寄っていくの



シロ

その仕種は、忠犬のようでもあるが、彼の気分はもつと大きく、現場の主を気取っているようである。

昨年の夏の頃は、ずいぶん痩せて頼りなげな姿であったが、今では毛艶も良く肉もついて、すっかり逞しくなった。向に見向きすらしない。

私達が、現場で図面をひろげ語りあう足下で、彼は「ふむ、ふむ、なるほど」と言わんばかりのしたり顔で、ゆったりとうなづくのである。その姿は、主の貫禄十分であり、庭先で過保護に育てられている番犬とは、一味も二味も違う鋭さと風格がある。

この「シロ」の風格は、酷暑をものともせず、広い工事現場を縦横無尽に駆けめぐる野性の中で、しぜんと育まれてきたものであろう。私は、この「シロ」と逢う度

に、主とは、何であるかを考えさせられてしまふ。▼家庭の主は父親であり、会社は社長、一国の主は総理大臣であらう。

この主しだいで、家族や社員国民の幸、不幸が決まるといつても言い過ぎではあるまい。いま特に気に懸るのは、家庭の主である。曾ての「家長制度」が崩壊して、その後は家族一人一人の人權が、親子の関係を越えて尊重される民主社会が実現し、男女・長子

男の背中

次子の不平等などの弊害をとり除いた反面で、一家の柱となる父親の権威を著るしく失墜させた。

尤も、これは今の制度がそうさせたというよりも、むしろ制度の庇護がなくなった父親が、自らの認識と努力によって築かなければならない主としての権威を、自らが放棄しているといったほうがより適切なものかもしれない。こう言うと、読者の中には「私はそんなことは決してない」と憤慨される方もいるかも知れないが、それならば結構なことであり、敬意を表したい。しかし、こういう著しい傾向があることも、残念ながらまた事実でもある。

▼温室の中では、決して大木は育たないのと同じように、人の器や品性も、冷たい風雪に耐えてこそ大きくもなり、磨かれもするのだと思う。目先の事や我欲のみに熱中したり、走りすぎて、社会の変化に正しく対応していけなかつたら、人の道を踏みはずしたり、ゆとりや暖かさを失い、後についてくる家族を見守り、育てる広い心までなくすることになる。もし、そんな父親が、いくら威張り散らしたところで、それは所詮空威張というもので、決して家族を善導することはできず、むしろ、家族をも卑屈な枠の中にはめこむことにもなる。

▼「子供は、親の背中を見ながら育つ」といわれる。世の中を見廻すと、社会的地位のある人や、ふだん肩で風を切っているような人の中にも、おやつと思うほど、その背中ではだらしなく寂しかった

り、泣いたりしているものがある。反対に、老人やひ弱な者、泥まみれになって黙々とまじめに働く者の中にも、背中が意外なほどに大きく見え、威厳があつて、何かを強くうったえかけてくるものもある。この両者の差こそ、それぞれこの不運の生き様の違いがなせるものであり、男は特に父親は、常に正義感と情熱、努力を旗印として、いかなる困苦にも堂々と立ち向かつていく日々の生活姿勢の大切さを痛感せずにはいられない。

▼父親としての風格を磨くことは、己を磨くだけでなく、家族、特に子供を磨くことにもなるのである。「ローマは一日にして成らず」というが、風格も同じで、一朝にして磨く術はない。われら父親は、次のことばを胸の中に刻みこんでおこうではないか。

「金を残して死ぬのは下、事業を残して死ぬのは中人を残して死ぬのは上」それにしても、私自身己の背中が気に懸る。